論文審査の結果の要旨

氏名：大　塚　朋　之
専攻分野の名称：博士（医学）
論文題名：パーキンソン病に合併した側弯に対する視床下核刺激療法の影響
審査委員：（主 査）　教授　徳　橋　泰　明
（副 査）　教授　阿　部　　修　　教授　長　岡　正　宏
教授　亀　井　　聡

姿勢異常は、Parkinson 病における特徴的な症候であるが、病状の進行度と相関して発生頻度や生活障害度が増加することが知られている。本研究は、姿勢異常のうち側弯に注目し、視床下核に対する脳深部刺激療法(Deep brain stimulation: DBS)による側弯に対する矯正効果について検討した。側弯に対する矯正効果は、症例報告や実臨床で時に経験するが、エビデンスによる有効性は報告されていない。そこで本論文は側弯を伴う 48 名の進行期 Parkinson 病患者に対し、ADL 評価(Unified Parkinson Disease Rating Scale part II: UPDRS II)、運動症状評価(UPDRS part III)を術前、術後の最も症状が軽快している時間帯(best-on 時)、最も症状が悪化している時間帯(worst-off 時)にて評価した。また、重症度は best on 時の Hoehn-Yahr 重症度分類で評価した。側弯度、後弯度は best-on 時の全脊椎立位単純エックス線写真の正面像、側面像を DBS 術前、術後 6 ヵ月、12 ヵ月にて Cobb 法に準じて計測した。なお、計測は単純エックス線写真をデジタルデータ化してコンピュータ画面上で測定した。

その結果、対象症例の重症度は Hoehn-Yahr 重症度分類で平均 2.5±0.8 であった。側弯度の経過では、術前に Cobb 角 10 度以上の側弯 48 例中 30 例(62.5%)が、術後 6 ヵ月で 25 例(52.1%)、術後 12 カ月にて 23 例(47.9%)に減少した。術後に Cobb 角の減少した症例は、術後 6 ヵ月で 28 例(58.3%)、術後 12 ヵ月で 33 例(68.9%)にみられた。全症例の Cobb 角の平均値は術前と術後 6 ヵ月で有意差がみられたが、術後 6 ヵ月と術後 12 ヵ月では有意差はなかった。また、運動症状 UPDRS part III の障害優位側と側弯凸側に相関性はなかった。後弯度に関しては術前、術後 6 ヵ月、術後 12 ヵ月の 3 群間で有意差はみられなかった。

以上の結果から、視床下核に対する脳深部刺激療法は、Parkinson 病患者の前額面の姿勢異常、側弯の改善効果があることを統計学的に証明した。

よって本論文は、博士（医学）の学位を授与されるに値するものと認める。

以　　上

平成２７年２月１８日